



第1学年担任活動を通して総合工学システム学科に思うこと

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土井, 智晴 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00007628

第 1 学年担任活動を通して総合工学システム学科に思うこと

土井 智晴*

Consideration for the Industrial Systems Engineering of OPCT through Activity in Charge of First-year Class

Tomoharu DOI*

要旨

大阪府立工業高等専門学校（以下、本校）は、平成 17 年度に全国の高専で始めて、1 学年 200 名を単一学科の総合工学システム学科の学生として受け入れた。筆者は、総合工学システム学科（以下、R 科）の 2 期生として入学した第 1 学年 5 組を担当した。本報告の 1 章では、本校の簡単な沿革と総合工学システム学科の紹介を述べ、2 章は、1 年 5 組のみで実践した活動で特筆すべきことを各節にまとめ、その活動の狙いや効果および改善点を述べた。3 章では、平成 18 年度の担任経験を基に従来の 5 学科体制から 1 学科体制への変化およびその注意点について、感じ考えたことを一考察として述べる。この 3 章が本報告の主要部であり、そこでは、「学生は R 学科生として育てているが、専門学科の教員が R 学科教員に生まれ変わっていない」と指摘し、平成 19 年度当初に武田校長から提示された「新しい大阪府立高専・こころの通い合う教育環境再生計画」を本校一体となって推進していく必要があることを述べている。そして、4 章では本報告をまとめた。

キーワード：教育実践，特別活動，ホームルーム活動，総合工学システム学科

1. 緒言

本校は、昭和 38 年に開校し機械工学科、電気工学科、工業化学科、土木工学科の 4 学科体制でスタートした。その後、平成 3 年に 2 クラスあった機械工学科の 1 クラスをシステム制御工学科として新設し、電気工学科を電子情報工学科、土木工学科を建設工学科に名称変更した。そして、平成 17 年に専攻科を設置し、従来の 5 学科体制から 1 学年 (40 名 5 クラス) を 1 学科とする「総合工学システム学科」を設置した (総合工学システム学科の略記である「R」の文字は Renaissance「(芸術・学問などの) 復興、復活; 新生; 再生の意」の頭文字であり、本科学士の学籍番号等に使われている)。

明治維新以後、工学は、機械・電気・化学・土木等、それぞれの領域で個別に発展し、また細分化してきた。しかし、近年 1 つ工学分野のみで解決できない複数の工学分野に係わるエネルギーや環境等の複雑な問題が多くなっている。そのような状況の中で、産業技術に対するニーズも複合化・融合化している。そこで、ものづくりに

関する企画・設計・生産・販売をトータルに考え、リーダーとして実践できる技術者を育てるため、本校では総合工学システム学科を開設することとした。

筆者は、平成 18 年度に R 学科 2 期生として入学した 1 年 5 組を担当した。本報告では、5 学科制から 1 学科制への移行について、担任活動を通して総合工学システム学科に思うことをまとめている。したがって、一般的な議論ではなく、著者の眼でみたこと身体で感じたことを基にした、極めて主観的な考えとなっていることを冒頭で断っておく。

2. 担任活動

ここでは、筆者のクラス (1 年 5 組) が行った担任活動について述べる。また、筆者は、平成 18 年度に引き続き、平成 19 年度も第 1 学年の担任をすることになっている。したがって、5 組で行った各取組の反省や平成 19 年度に向けた改善点等も述べる。なお、第 1 学年は、基本的に学年で一体感のあるホームルーム活動を行っている。その活動については、参考文献 [1] を参照されたい。

2.1 朝の HR 一般科目の教員が担任をする場合は、担任クラスの授業を受け持つことになっている。これにより、担任クラスの学生との共有時間が多くなり、学生指導

2007 年 4 月 11 日 受理

*総合工学システム学科メカトロニクスコース (Dept. of Industrial Systems Engineering : Mechatronics Course)

上有益だという考えだと思われる。しかしながら、筆者は専門学科の教員であるため、担任クラスの授業科目を持つことができない(1年生の専門科目である総合工学実験実習Ⅰを担当したが、実習科目であるため、2週間単位で担任クラスの学生3~4名を担当するだけで、担当クラスの学生指導として活用できる時間にはならない)。

そのような状況をいくらか軽減し、学生との共有時間を多くするために原則毎朝8時50分に教室へ行き学生とコミュニケーションを取るようにした。これにより、朝の遅刻や欠席状況が把握でき、無断欠席については、保護者と連絡を取るようにした。また、年度当初には、多くの配布物や連絡事項のための時間、未知の事項に関する質疑応答の時間とした。しかしながら、前期中間試験以降あたりから、9時ちょうどに登校してくる学生が多くなり、本来の目的はあまり達成できず、板書による伝達および日直日誌の確認・コメント記入、時折教室美化のためゴミ拾いを指示する等の業務をすることが主となった。

それを受けて平成19年度では、新入生登校日(3月16日)と入学式当日に学生および保護者に対して、「8時45分に校門通過、8時50分に教室到着」を明確に伝え、登校した後は「朝の読書の時間」とし、一人1冊の本

を読ませている。また、学生とのコミュニケーション手段のひとつとして班ノートを実践する予定である。

2.2 クラス通信 高専は特殊な学校種であり、学生自身が1年間どのように生活したらよいか、また、5年間をどのように計画をもって高専生活を送るべきかを事前に知る機会が少ない。また、保護者(本校卒業生が保護者や親戚である場合や兄弟がすでに入学している場合を除いても)、本校の中でどのように我が子が勉学に励み育てゆくのかを知る機会が少ない。

そのため情報提供の一環としてクラス通信を21回発行した(クラス通信の名前は、学生による命名で「土伊ちゃん通信」となった。伊は副担任の伊與田教授に由来する)。図1に創刊号と最終号の縮小版を示す。毎回の話題はそのときのホームルームの内容に合わせたものであり、副担任の伊與田教授にも寄稿を頂いた。特に、ポイントとしたのは、試験前の自宅学習の喚起、成績票配布後の気持ちの持ち方(良くて安心しない、悪くて前向きに)、高専祭の取組であり、高専祭後は学校行事も少なるため、職業観や進級に絡めた話題を多くした。紙面はマイクロソフト社のパワーポイントで作成した。

このようなクラス通信は、学生・保護者への情報提供と

祝！御入学

一年間の学びの入り、入学おめでとうございます。本校は、大阪府立工業高等専門学校(以下、高専)として、本校の目標は、学生一人ひとりが、主体的に学び、自ら考え、行動し、社会に貢献できる人材を育てることです。本校では、授業だけでなく、学生生活 전반を通じて、このような人材を育てることを目指しています。入学おめでとうございます。本校で、新たな学びのスタートを切ってください。

クラス通信

編集 智晴
文責: 1年0組
担任: 土井智晴
060406 00.0
072(020)0510

Profile

今日、記者として、自分(自己紹介)の紹介カード(プロフィール)を作成し、担任の先生に提出しました。担任の先生は、自分の紹介カードを見て、自分(自己紹介)の紹介カードを、担任の先生に提出しました。担任の先生は、自分の紹介カードを見て、自分(自己紹介)の紹介カードを、担任の先生に提出しました。

命名！

クラス通信の命名は、学生一人ひとりが、主体的に学び、自ら考え、行動し、社会に貢献できる人材を育てることです。本校では、授業だけでなく、学生生活全般を通じて、このような人材を育てることを目指しています。入学おめでとうございます。本校で、新たな学びのスタートを切ってください。

1.2ある？

高専生活のスタートは、大変なことです。しかし、高専生活は、学生一人ひとりが、主体的に学び、自ら考え、行動し、社会に貢献できる人材を育てることです。本校では、授業だけでなく、学生生活全般を通じて、このような人材を育てることを目指しています。入学おめでとうございます。本校で、新たな学びのスタートを切ってください。

感謝感謝

高専生活のスタートは、大変なことです。しかし、高専生活は、学生一人ひとりが、主体的に学び、自ら考え、行動し、社会に貢献できる人材を育てることです。本校では、授業だけでなく、学生生活全般を通じて、このような人材を育てることを目指しています。入学おめでとうございます。本校で、新たな学びのスタートを切ってください。

(a) 創刊号

試験終了

試験が終了しました。試験の結果は、自分(自己紹介)の紹介カード(プロフィール)を作成し、担任の先生に提出しました。担任の先生は、自分の紹介カードを見て、自分(自己紹介)の紹介カードを、担任の先生に提出しました。

土伊ちゃん通信

編集 智晴
文責: 1年0組
担任: 土井智晴
070220 50.0
072(020)0510

自主・自律

高専生活は、学生一人ひとりが、主体的に学び、自ら考え、行動し、社会に貢献できる人材を育てることです。本校では、授業だけでなく、学生生活全般を通じて、このような人材を育てることを目指しています。入学おめでとうございます。本校で、新たな学びのスタートを切ってください。

感謝感謝

高専生活のスタートは、大変なことです。しかし、高専生活は、学生一人ひとりが、主体的に学び、自ら考え、行動し、社会に貢献できる人材を育てることです。本校では、授業だけでなく、学生生活全般を通じて、このような人材を育てることを目指しています。入学おめでとうございます。本校で、新たな学びのスタートを切ってください。

(b) 最終号

図1 クラス通信

して有益であり、平成 19 年度の担任活動でも実践してゆきたいと思っている。また、学生自身が記事を書いたり、学生の希望するアンケートを採取したりして、学生参加型の方法も模索したいと考えている。

2.3 保護者懇談 保護者懇談は、学校が指定している 6 月下旬以外に高専祭と後期中間試験の成績票配布後に行った。以下、各懇談会について述べる。

学校指定の 6 月下旬の保護者懇談会 全クラス学生の保護者を対象として実施した。来校頂けなかったのは数名で 90% を越える保護者に対して個人面談形式で実施した。どの保護者も関心は初めての成績結果にあり、欠点科目のある保護者には単位取得の説明が多くなるが、こちらからは、家庭での学習態度や家族とのコミュニケーションの取り方などを伺うように努めた。

高専祭(11月12日)の保護者懇談会 高専祭では演劇の上演を行った。その公演後体育館で観覧に来られた保護者(20名前後)に残って頂き、クラス懇談という形式で行った。この際に前述のクラス通信の冊子(創刊号から)を配布した。話題の内容は、高専祭後はお祭り気分が抜けず勉学が疎かになり後期中間試験を失敗する学生が出てくる点を強調して説明した。そのクラス懇談会の後、希望のあった数名の保護者に対して個人面談形式で保護者懇談を行った。このときに懇談を希望する保護者は相談事を持っていたので、状況の説明を伺った後日に学生とも面談をもち、問題解決に努めた。

高専祭は学生達の特別活動(HR 活動およびクラブ活動)の成果展示会に相当するので保護者への参加を積極的に行い、併せて保護者懇談をすることが望ましいと考えている。したがって、平成 19 年度も担任のクラスでは開催予定である。また、かつて行われていた学科単位の保護者懇談会を R 学科として教務主事室が行っている。平成 18 年度はこの保護者懇談会と時間的に重複することがあったので、R 学科懇談会との調整が平成 19 年度の課題になると考えている。

後期中間試験後の保護者懇談会 後期中間成績票の裏面に成績の現状を「良好・不安・心配」の三段階で担任として総合判断して、「心配」と判断にした学生について、原則三者懇談を行った。なお、心配の判断基準は、個人平均が 60 点未満であることをベースに、出欠状況が好ましくない、特殊事情がある等を加味して総合的に担任として判断した。また、希望があった保護者からの懇談も受け付けた。約 10 名の該当者があり、ほぼ全ての保護者が懇談に来校した。そこでは、原級留置(留年)の可能性の度合いに合わせて詳しく説明し、家庭学習を促進するよう保護者の協力を求めた。この結果、半数以上の学生は早期から積極的に勉強するようになった。ただ、残念ながら落胆して勉学に消極的になった学

生もあつたように感じている。平成 19 年度も同様に実施する予定である。ただ、平成 19 年度は後期中間試験の時期が大きく変わるため年末開催になると思われる。

2.4 学生指導 ここでは、学生の精神的な活動に対する指導(厳密には指導と言いが)について述べる。学生の個人的な情報を本報告に記載できないので、具体性を欠くが著者が経験し、感じたことを述べる。

平成 18 年度の担任活動の中で少なくない時間を不登校学生や不登校になり始める学生の指導に費やした。通常の学生指導であれば、研究室等に召集をかけ、適切な説諭をすることで多くの問題が解決する。しかしながら、不登校の問題については、欠課や欠席が多いため、学生へ直接的に働きかける機会が限定される。そのため、電話やメールを通して顔の見えない状態でコミュニケーションをすることも多く、表情の見えない状態での指導に苦心した。また、7 時以降に保護者が帰宅してから、筆者の自宅電話で保護者を介して話すこと等もあり、業務とプライベートの切り分けが難しいことも感じた。また、精神的な疾患に近い場合は、一般教員ではカウンセリング等の知識も持たないため、適切なコミュニケーションが行えているか、疑問の中で指導となった。

このような精神的な面の学生指導は著者のクラスのみでないと思われるので、小中高校に配置し始められているカウンセラーを本校にも配置してもらえればありがたいと考えている。なお、副担任制度を活用して教員 2 名で学生の話聞く等の指導ができたこと、学生主事室をはじめ保健室や学生相談室の支援も頂いたことは、非常に有益であった。これは本校の誇るべき体制であり、平成 19 年度も副担任および学生主事室・保健室・相談室等のサポートを受け精神的な学生指導を行っていく。

3. 総合工学システム学科への提言

3.1 総合工学システム学科の特徴 総合工学システム学科の特徴は、1~3 学年まで全員が同じ授業や実験実習を履修し、ものづくりのできるエンジニアとしての基本を身に付け、4・5 学年で専門コースに分かれ、各専門の基礎を身に付けるという点が特徴である。具体的には、1~3 学年の総合工学実験実習Ⅰ~Ⅲで、ものづくりの基礎を体験的に身に付け、3 学年の特別研究では、研究の手法等を学び、研究活動を経験する。また、4 学年の基礎研究では、工学専門分野の本格的な研究活動を経験し、同学年のインターンシップでは、企業のものづくり現場を体験する。そして、最終学年の 5 学年では、卒業研究のみでなく、総合工学実験実習Ⅳにおいて専門コースを越えたグループで複合的な問題解決を行う実験をする予定である。

3.2 混成学級と R 学科との変化の違い 筆者は平成 11 年度にも 1 学年を担当し、当時始まったばかりの混成学級の担任活動を通して得たことを参考文献[2]にまとめた。平成 18 年度の当初は、その当時と同じような変化であろうと心構えをしていたが、実際に 1 年間の担任活動を通して感じたことは大きく違っていた。

混成学級では、1 学年の学生でも学科への帰属意識が少なからず存在していた。しかしながら、現 R 学科の学生には、R 学科という帰属意識はないと思われる。また、それは R 学科という実体をイメージできるものを教職員が学生に提示できていないことが少なからず原因として存在していると考えられる。この帰属意識が無いことは大きな問題ではないように感じられるかもしれないが、担任活動を通して感じた重要な問題のひとつである。「入学してからコースを選択しよう」と前向きに考えられる学生は、ある意味 R 学科のイメージを持っているといえるが、新入生の中にはごく少数であるが、本校のアドミッションポリシー^[3]と本人適性の合致を確認せずに在籍し、R 学科の特徴を理解していない者がいるように感じた。特に、このような志望動機が弱い学生が、学力的にも弱い場合には、修学意欲の低下に直結するように思われ、それが前述したような不登校への入口になっているように感じている。したがって、教職員は R 学科の目指すものをしっかりとイメージ(あくまでも、各コースのイメージではなく、R 学科としてイメージである。)し、学生に伝え、学生の R 学科への有意義な帰属意識を喚起する必要があると考えている。

3.3 総合工学システム学科の目指すもの 前節では R 学科の目指すイメージの必要性を述べたが、現状はそのイメージをもつという前段階で教員サイドに問題があると感じている。端的に表現すれば、「学生は R 学科生として育っているが、専門学科の教員が R 学科教員に生まれ変わっていない(残念なことにコース教員に生まれ変わっている)」ことである。一般科目を担当する教員はもともと学年指向で 5 クラスの指導をしている(試験問題の統一等、若干の問題は存在する)。また、学校職員や技師は、学校制度改革に併せて組織改革が進み、R 学科の学生を育てる体制に移行し定常化しつつある。しかしながら、専門コースの教員は、4 年生が配属されるまで待ちの状態であるように感じる。確かに、専門コースとしてサービスすべきコース学生が存在しないので具体的な施策を講じるすべが無いのかもしれない。全教員が R 学科の所属であることを空気のように感じているのではないか。本校教職員は、R 学科の教員として 1～3 学年の R 学科の学生に積極的にサービスを施す必要があるはずである。専門コースへの配属希望数を増やすための努力ではなく、ものづくりができる総合的なエ

ンジニアを育てるという目標を目指した教育サービスを考案し実践すべきであると考えている。

3.4 ものづくりをする者のこころを涵養する ここまで、R 学科の目指すものをテーマにいくつかの指摘をしてきたが、観点を変えれば「R 学科の教育課程が提示されているから、R 学科としての教育サービスはすでに考案され実践されている」という理解も可能であり、まさにその通りである(一部計画と違う運用形態を取っているが定常時には正しく修正されるであろう)。そのようなことに気づきながらも、担任活動を通して、プレッシャーに弱い学生が多く精神面の教育の必要性について考えていたところに「新しい大阪府立高専・こころの通い合う教育環境再生計画」^[4]を議論する場に参加する機会を得た。その計画では、ものづくりの現場でリーダーとして活躍できるエンジニアのこころを育成するプログラムが R 学科の教育課程と連動していくつかの教育サービスが考案されている。教務面で R 学科を構築する教育課程と学生指導面で R 学科を構築するこころの通い合う教育環境再生計画を両輪にして、総合工学システム学科の発展を期待している。

4. 結言

本報告では、平成 18 年度の担任活動の経験を基に R 学科に対しての私的な考察をまとめた。したがって、本報告の一般性は非常に低く、かつ本校の教職員に向けた内容になっていることにご容赦を頂きたい。なお、本校以外の読者には、参考文献[4]に教育的に有意義な内容が盛り込まれているので、必要な読者は筆者宛 (doi@ipc.osaka-pct.ac.jp) に連絡を頂きたい。

参 考 文 献

- [1] 柴, 稗田, 井上, 西田, 土井, 山野, 児嶋, 瀧, 前田, 伊與田: 第 1 学年 HR 活動のまとめおよび各クラスの HR 活動のまとめ, 2006 年度ホームルーム実践記録, 大阪府立高専学生主事室 (2007.3)
- [2] 土井智晴: 混成学級の担任を経験して思うこと, 府立高専教育第 5 号, pp.11-18, 大阪府立高専学生主事室 (1999.3)
- [3] 大阪府立高専アドミッションポリシー: http://www.osaka-pct.ac.jp/sougou/outlook/policy_honka.html
- [4] 大阪府立高専: 新しい大阪府立高専・こころの通い合う教育環境再生計画, 大阪府立高専平成 19 年度第 1 回教職員会議資料(2007.4.4)